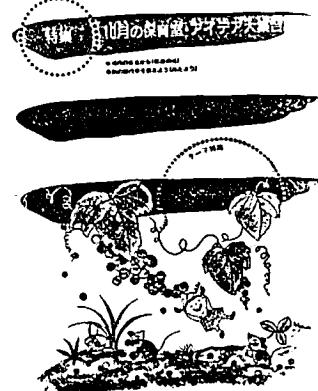




神原雅之
広島文教女子大学助教授

耳をそばだて 音楽を 聴いてみよう



最近の音楽環境は、私が幼かつたころと比べると、とてもよくなっていると思います。テレビやラジオ、カセットやCDなどで、いつでもなんかの音楽を聞くことができます。デパートや喫茶店などでは、いつでもBGMが流されています。幼稚園や保育園の生活でも、生活のはしばして音楽が聴こえます。音楽は以前とは比較にならないほど、私たちの生活のなかに深く浸透しているようです。

このような音楽環境は、よい意味でも悪い意味でも幼児の行動にすり込まれているようです。例えば、最近流行のサンカーネームソングを「オーレー、オレ、オレ、オレ」とリズミカルに口ずさみながら踊っている姿は象徴的です。おとながまねをしようとも、なかなかたいへんです。しかしその反面で、ふだんは不必要的音もたくさん聴こえていて、私たちの耳と心を侵している。どれもなんとなく聴いて、なんとなく覚えて、そしてなんとなく忘れられていく。このようなくない習慣も身につけているようです。音楽は何かのついでに、添え物のように聴き流されているように思われるのです。これはふだんの会話や活動にも当てはまります。

このようなことを私が思うのは、最近大勢の子どもと接するなかで、注意力の散漫な子、落ち着きのない子、わがままな子が気になっているからかもしれません。

このような子どもたちは、自由で、心のままに生きている、それが子どもらしいと見なされてしまう。例えば、リズムあそびのときに、音楽に合わせて歩いているのだけれども、なんとなく歩きながら音楽に合わせています。駆け足の音楽が聴こえてくると子どもたちは喜んで走りますが、そのはやる気持ちを制御できないで、かけっこと化してしまう子の多いこと。そこで「もつと音楽を聴いてみよう。耳と目と心を凝らして。そうすればもつと音楽がおもしろくなるよ」と声をかけたりります。が、子どもたちが耳をそばだてたくなるような音楽あそびをとっさに提案できないうときには、その言葉も躊躇してしまう。この習慣は、もはやリズムあそびのときだけの問題ではありません。生活のさまざまな場面で、おのおのの発達段階で可能な方法で、自分の心と体をセルフコントロールしようとする気持ちを醸成することができ望まれます。

「環境による教育」が呼ばれるなかで、おとな（援助者）の存在が過小評価されることがあつてはなりません。あそびの楽しさだけに終始するのではなく、同時に子どもが今もつてている注意力や觀察力を駆使しえる環境、ものごとの違いのおもしろさに意識が向けられるような環境の構成や援助の方法はどうしたらよいのか——私たちおとなの方割は、以前にも増して重くなつたといえるでしょう。